

# 横道遺跡

— 詳細分布調査報告 —

1983

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

## 序 文

このたび、本町の開発計画の一部に周知の遺跡である高原地区の横道遺跡が含まれることとなりました。横道遺跡は、本町内でも最古の縄文時代の遺跡であることが知られていましたが、その範囲などはあまりよくわかつていませんでした。このため遺跡の詳細分布調査を実施し今後の保存策を講ずることにいたしました。

調査の結果は、本報告書に収録いたしましたとおり、幾星霜の歴史を物語る貴重な資料を発見することができました。

今後は、これらの資料の記録と保存をいたし、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるとともに教育・学術・文化振興と郷土の歴史を知る重要な資料として幅広く活用していく所存であります。

終りに、本報告書を発刊できる運びとなりましたことを喜ぶとともに、調査実施にあたり、多大なご援助・ご協力をいただきました島根県教育委員会文化課や広島大学文学部考古学研究室をはじめとする関係各位に対して深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和 58 年 3 月

瑞穂町教育委員会

教育長 河上 浅雄

## 例　　言

1. 本書は、1982年度において実施した島根県邑智郡瑞穂町の横道遺跡の詳細分布調査の報告である。
2. 調査は瑞穂町教育委員会が主体となり、文化庁ならびに島根県教育委員会から補助金の交付をうけて1982(昭和57)年10月20日から11月26日までの間、実施した。
3. 本書の執筆は、I. 澤田隆之・小笠原義宣、II. 吉川　正、III. 小池伸彦、IV・V. 河瀬正利が分担してあたり、河瀬が編集した。なお、I・IIについては、河瀬が修正加筆した。また、付録については、林　正久(島根大学)、成瀬敏郎(兵庫教育大学)両氏の研究報告を収録することができた。
4. 出土の安山岩・黒曜石の原産地推定には、薦科哲男氏(京都大学原子炉実験所)、また、出土石材の鑑定には、沖村雄二氏(広島大学理学部助教授)をわざらわせた。
5. 調査資料の整理、実測ならびにトレースは、主として河瀬・小池があたったが、島立　桂、竹広文明氏など広島大学文学部考古学研究室の学生諸氏の協力をえた。
6. 写真関係では、調査関係を、小池・澤田・小笠原が、遺物を河瀬が担当した。

# 横道遺跡

— 詳細分布調査報告 —

## 目 次

### 序

Iはじめ	1
II遺跡の位置・環境	3
III調査の経過	7
1. 調査の経過	7
2. 発掘調査日誌抄	8
IV調査区の概況と出土遺物	9
1. 調査区の概況	9
2. 出土遺物	14
Vまとめ	19
付編 横道遺跡の火山灰と造物包含層の年代(林正久・成瀬敏郎)	21

## 図 版 目 次

- |      |            |                   |
|------|------------|-------------------|
| 図版第1 | a. 横道遺跡遠景  | b. 遺跡東半部近景        |
| 図版第2 | a. A区全景調査前 | b. A区全景調査後        |
| 図版第3 | a. C区全景調査後 | b. C区南壁断面         |
| 図版第4 | a. D区全景調査後 | b. D区土壤検出状況       |
| 図版第5 | a. F区西壁断面  | b. G区西壁断面         |
| 図版第6 | a. 繩文土器    | b. G区第5・6層出土石核・剥片 |
| 図版第7 | a. 石器・剥片類  | b. 磨石・砥石          |

## 挿 図 ・ 表 目 次

第1図	瑞穂町と横道遺跡位置図	2
第2図	横道遺跡と出羽川流域遺跡分布図	4
第3図	荒横遺跡出土石器実測図	5
第4図	横道遺跡地形図	9
第5図	A区東壁・B区南壁断面図	11~12
第6図	C区東壁・南壁断面図	11~12
第7図	D区西壁断面図	11~12
第8図	D区土壤実測図	13
第9図	G区西壁断面図	13
第10図	繩文土器拓影実測図	14
第11図	G区第5・6層出土石核・剥片実測図	15
第12図	石器・剥片類実測図	16
第13図	磨石・砥石実測図	17
第14図	横道遺跡G区断面と試料採取位置	23
第15図	横道遺跡G区の土壤分析結果	23
第16図	横道遺跡D区西(285m地点)の火山灰の鉱物組成	24
表1	島根県にみられる主要テフラの層序	22

# I はじめに

横道遺跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字原村118番地（通称高見字段ノ原）に所在する（第2図1）。現地は、瑞穂町立高原小学校の南方約100mの出羽川左岸の段丘上にあり、出羽川からの比高は約30mである。現在では段丘上は一部水田や畠として利用されているが、大部分は山林となっている（図版第1）。

遺跡のある丘陵上は、1964（昭和39）年ごろ畠地としての開墾が進められたが、この際に土師器、須恵器等が採集され、遺跡であることが確認されるにいたった。その後、採集された土器片の整理が進められたところ、なかに縄文早期の押型文土器が含まれていることがあきらかにされた<sup>①</sup>。また、1978（昭和53）年の建築用粘土や水田の客土として上取り工事が行われた際にも縄文時代の土器、石器等が採集され、崖面を中心に急速実施された試掘によても表土層下の橙褐色土層に遺物が含まれているらしいことが想定された<sup>②</sup>。のことから當時、島根県においては唯一の押型文土器出土地としてしられるようになったのである。

ところが、1981（昭和56）年になって、遺跡のある丘陵西半部に農道の建設計画が出され、建設地内に遺跡が含まれる懼れが高くなかった。このため、瑞穂町教育委員会では、遺跡の範囲や性格、遺物の出土層位等を確認するための詳細分布調査を計画するにいたったものである。

調査実施にあたっては、瑞穂町において調査体制を組織することが困難であったため、島根県教育委員会文化課と協議した結果、調査担当者として広島大学文学部の河瀬正利氏に依頼することとした。また、調査費については、国庫補助金（100万円）、県費補助金（50万円）の交付を受け、町負担金（50万円）の計200万円を充当し、1982（昭和57）年10月20日から11月26日までの間、以下の調査員で実施した。

## （調査員）

河瀬 正利（調査担当・広島大学講師）

小池 伸彦（広島大学大学院博士課程）

澤田 隆之（瑞穂町教育委員会次長補佐）

小笠原義寛（〃 社会教育指導員）

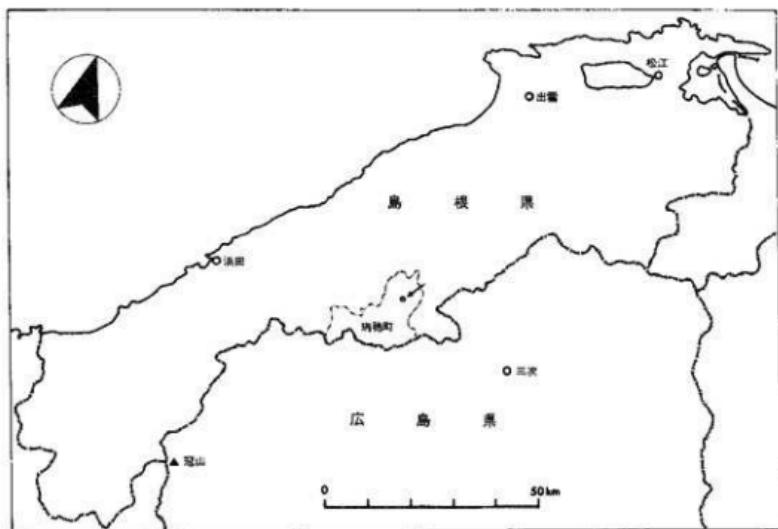
## （調査指導）

勝部 昭（島根県教育委員会文化課文化財保護主事兼埋蔵文化財第1係長）

ト部 吉博（〃 埋蔵文化財第1係主事）

潮見 浩（広島大学教授）

中越 利夫（広島大学助手）



第1図 瑞穂町と横道遺跡(矢印)位置図

このほか、現地での調査にあたっては、地元の三上憲昭、井上房次、藤田振山、谷ユキ、三上福三、日高義助、河手隆人(瑞穂町文化財愛護協会々員)、東義正、太田文夫、洲浜信夫(瑞穂町役場)の各氏の参加・協力をうけた。また、発掘予定地の土地所有者の舟津喜六、井上方善の両氏からは、土地の発掘について快く承諾をいただいた。記して謝意を表したい。

#### 注

- (1) イ. 宍道正年『島根県の縄文式土器集成 I』PP.24~26. 1974。  
ロ. 吉川 正『瑞穂町の遺跡』PP.28~29. 瑞穂町誌 第3集所収. 1976。
- (2) 試掘は、今岡徳、二宅博士、吉川正の三氏で実施された。試掘区の土層断面図によれば、表七層の下に淡茶色土層(今回の調査で橙褐色土層としたもの)、淡黄色土層(同じく上位火山灰層としたもの)と続いており、淡茶色土層中より縄文土器が出土することが確認されたらしい。

## II 遺跡の位置・環境

広島県との県境をなす標高600~800mの中国脊梁山地に源を発した出羽川は、瑞穂町のほぼ中央部を蛇行しながら南西から東北に向って流れ、その流域には秩長な沖積平野や河岸段丘を形成する。瑞穂町田所から出羽にいたる地域には、川の両岸にかなりひろい水田地帯がひろがって出羽盆地を形成しており、多くの人々は、水田経営を基盤とした生活を営んでいる。<sup>1)2)</sup>

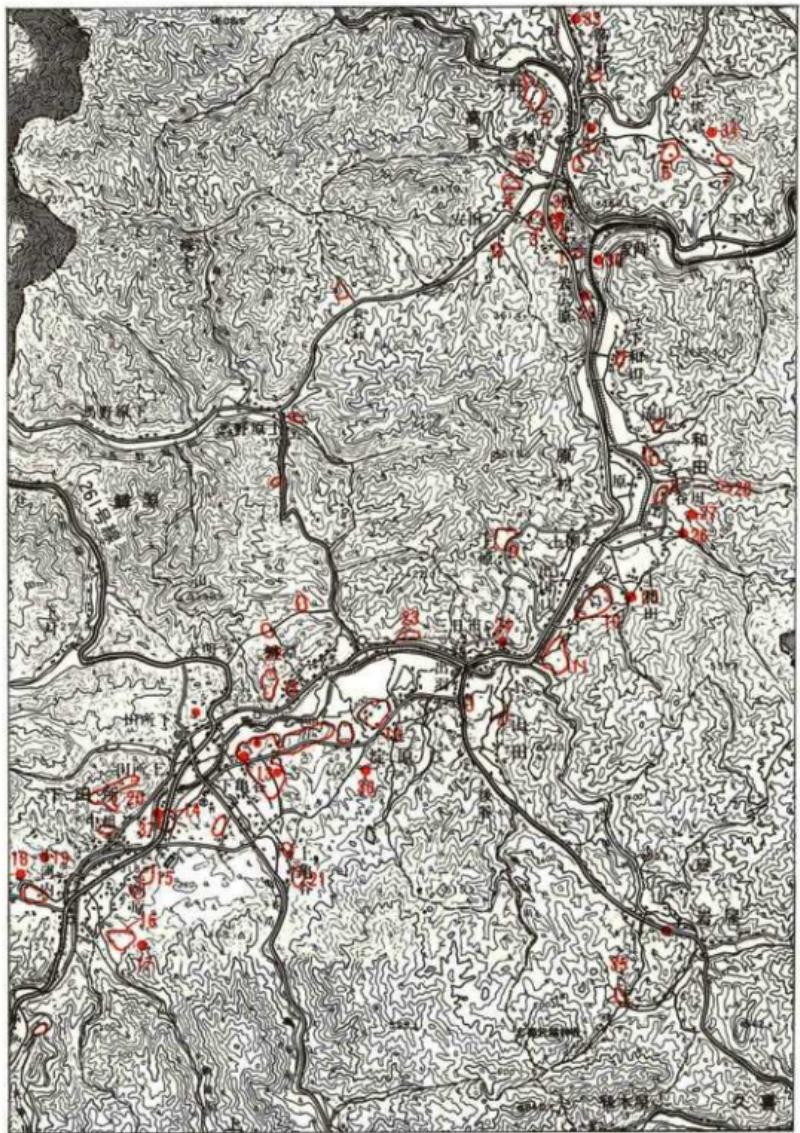
今回調査の対象となった横道遺跡は、出羽盆地の最北端部に位置し、出羽川は、この付近で北から南へ流れる出羽川支流の高見川と合流し、流路を東へ変えて、羽須美村口羽で江の川と合流する。遺跡は、出羽川左岸の標高280~285mの丘陵上に位置し、出羽川からの比高は、およそ30mを測る。また、丘陵の北側を流れる高見川からも約30mの比高がある。

なお、高見付近では、基盤は、高見第3紀層と呼ばれる海成層で形成されており、第3紀中新世の化石が産出することから地質学上でも注目されている地域である。

瑞穂町内の遺跡・遺物については、「全国遺跡地図(島根県)」<sup>3)</sup>や「瑞穂町誌」などによれば、現在のところ約100か所の遺跡が確認されている。これらは、出羽川両岸の比高20~50mの低丘陵上に位置するものが多く、時期的には旧石器時代から歴史時代にいたるものまでがある。

旧石器時代の遺跡としては、岩屋の荒縄遺跡(第2図35)のほか、今回の調査であきらかとなつた横道遺跡があげられる。荒縄遺跡では、表面探査のため出土層位などは明確でないが、安山岩製の石器2点が出土している。第3図1は、長さ7.2cm、幅2.6cm、厚さ1cmで横長剥片を素材としている。背面に加工調整がほどこされていることから、ナイフ形石器として紹介されている<sup>4)</sup>が、左側面は全面が自然面であり、鋭利な縁刃が残っていない。また、先端部が鋭く尖っていることからみてナイフ形石器とするよりも槍先的機能をもつ尖頭器状石器とみるのが妥当であろう<sup>5)</sup>。2は長さ5.1cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmで、左側縁部に剥離調整がみられ、削器と考えられる。いずれも形態からみて旧石器時代後期のものと推定され、このころから、付近での人々の生活がはじまつたことをうかがわせる。

つぎの縄文時代の遺跡には、横道遺跡、長尾原遺跡(第2図13、以下同じ)、大畠遺跡(大草)、大字根遺跡(7)<sup>6)</sup>がしられている。長尾原遺跡は、下龜谷の比高20~30mの低丘陵上一帯にひろがる縄文時代から古墳時代にかけての複合遺跡であるが、押型文土器2点が出土している。押型文土器は、表面に粗大な楕円文がめぐり、口縁部内側には幅広い斜行の沈線がほどこされている。押型文土器としては新しい様相をしめす高山寺式土器である。大草の丘陵上に所在する大畠遺跡では表裏両面に縄文のほどこされた土器が出土しているが、詳細については、明らかでない。また、伏谷の沖積地に位置する大字根遺跡からも無文の縄文式土器が出土したといわれているが<sup>7)</sup>、現在では遺物が散佚しているため、内容についてあきらかにすることはできない。

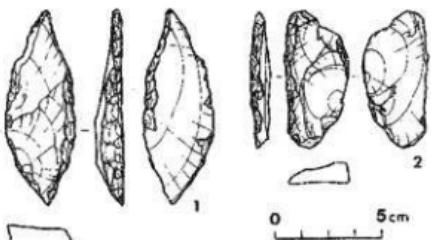


第2図 横道遺跡と出羽川流域遺跡分布図(1:50,000)

弥生時代の遺跡では、牛塚原遺跡(16)、淀原遺跡(12)、順庵原A遺跡(14)、長尾原遺跡、石堂遺跡(8)、賀茂山遺跡(4)、段の原A遺跡(3)、重石遺跡(5)などがしられている。このうち弥生時代前半のものとしては、牛塚原遺跡、順庵原A遺跡、淀原遺跡がある。これらの遺跡は出羽盆地の田所から出羽にいたる地域に位置しており、沖積地の比較的ひろいところから弥生時代の人々の生活がはじまったこ

とをしめしている。弥生時代の後半になると、遺跡はしだいに増加し、出羽川流域の各地に分布するようになってくる。弥生時代の農耕社会が、山間地域にまで浸透してきたことをしめしている。そして終末期になると階級分化の進展の結果、共同体の首長墓としての順庵原1号墳墓<sup>(37)</sup>や御華山墳墓<sup>(22)</sup>などが築かれている。順庵原1号墳墓は、出羽川右岸の丘陵上に築かれており、墳丘が10m×8m前後の四隅突出形墳墓である。墳丘上には箱式石棺墓2基、木棺墓1基の3つの主体があり、主体内および墳丘周溝中からガラス小玉、弥生式土器などが出土している。墳丘裾には貼石がめぐり、周溝内にはストーン・サークル状遺構がみられる。また、鶴潟の御華山墳墓は、長さ2.8m、幅1.5mの墓壇のなかに箱式石棺が構築されており、弥生式土器、人骨などが出土している。出土遺物からみて、いずれも弥生時代終末期から古墳時代初めにかけての墳墓と推定される。

つぎの古墳時代になると出羽川とその支流域を中心に古墳や遺跡はさらに増加していく。集落関係の遺跡としては、長尾原遺跡、順庵原B遺跡(14)、宇山遺跡(9)、倉谷遺跡、狼原遺跡(11)などがある。長尾原遺跡では竪穴式住居址、土壙墓のほか古墳時代後期のものとおもわれる製鉄遺



第3図 荒横遺跡出土石器実測図

#### 第2図に記載した遺跡名

1. 横道遺跡	11. 猿原(オオカヌ原)遺跡	21. 杉谷古墳群	31. 段の原古墳
2. 段の原B遺跡	12. 淀原遺跡	22. 御華山古墳群	32. 高見古墳
3. 段の原A遺跡	13. 長尾原遺跡	23. 従田古墳群	33. 萩原古墳
4. 賀茂山遺跡	14. 順庵原遺跡	24. 七神社石棺墓	34. 大字根古墳
5. 重石遺跡	15. 出張遺跡	25. 長畠古墳	35. 荒横遺跡
6. 宮原遺跡	16. 牛塚原遺跡	26. 安楽寺古墳	36. 江迫横穴群
7. 大字根遺跡	17. 牛塚古墳群	27. 石堂横穴	37. 順庵原1号墳墓
8. 石堂遺跡	18. 小河内1号古墳	28. 石堂崎古墳群	
9. 宇山遺跡	19. 小河内2号古墳	29. 矢広原古墳	
10. 大番原遺跡	20. 南古墳群	30. 塚原古墳群	

構などが検出されている。竪穴式住居址は、一辺3~4m前後の隅丸方形の平面をなし、壁にはカマドがつくりつけられている。製鉄遺構では柱穴、溝、鉄滓溜りなどが検出され、鉄滓も多数出土している。鍛冶遺構かもしれない。また、順庵原B遺跡では、竪穴式住居址1軒、土墳墓2基などが検出されている。住居址は一辺1.65mの隅丸方形で小規模なものである。通常の住居とは考えにくく、作業小屋的なものであろうか。

古墳は、いまのところ町内で20基以上が確認されている。前半期のものと推定される古墳では、淀田古墳群<sup>(23)</sup>(23)、御草山古墳群<sup>(24)</sup>(24)などがある。大規模なものはなく、直径10m前後の円墳や方墳が多い。段の原古墳(31)にみられるような小形の竪穴式石室も前半期のものと推定される。古墳時代後半には、丘陵斜面に横穴式石室を内部主体とする直径10m前後の円墳が築造されている。牛塚古墳群(17)、杉谷古墳群(21)、石塚峠古墳群(28)、塚原古墳群(30)などがあり、江迫横穴群<sup>(36)</sup>(36)、石堂横穴(27)などの横穴墓の構築も行われる。

また、この地域では古墳時代から奈良・平安時代のものとみられる須恵器の窯跡も数多く存在している。矢ヶ谷窯跡、コオギヤスミ窯跡、桜ヶ谷窯跡、江迫窯跡などがある。いずれも久永庄の地域内にあることから久永古窯跡群と総称されており、古墳時代後半から歴史時代にかけての上器生産地として注目される。

このほか、瑞穂町内には、製鉄関係の遺跡も数多く分布している。精錬場であるたたら跡や砂鉄を採取した鉄穴溝など確認されたものだけでも約70か所にのぼっている<sup>(25)</sup>。近世には、「出羽鋼」と呼ばれるような良質の鋼を産出していたことがしられており、製鉄遺構の多くは、近世以降のものとみられるが、古墳時代後期の長尾原遺跡の製鉄遺構の存在からみて、古くより鉄生産が行われていたことはあきらかであろう。

## 注

- (1)『全国遺跡地図』、32、鳥取県、国土地理協会、1978。
- (2) 瑞穂町『瑞穂町誌』第2集、第3集、1966、1976。
- (3) 吉川 正『瑞穂町の遺跡』『瑞穂町誌』第3集、1976。
- (4) 藤野次史氏の教示による。第3図は藤野次史氏作成の原図によった。
- (5) 前掲注(3)文献。
- (6) 門脇俊彦氏の教示による。
- (7) 門脇俊彦「順庵原1号墳について」『鳥取県文化財調査報告』第7集、鳥取県教育委員会、1971。
- (8) 前掲注(3)文献。
- (9) 瑞穂町役場の東方、約300mの段丘上に位置し、一辺6~8mの方墳3基ないし4基と洋8mの円墳2基から構成される。
- (10) 御草山墳墓のある丘陵上に分布し、方墳、円墳等から構成される。規模は、直径10m前後のものが多い。
- (11) 今岡 稔、吉川 正、横山純夫「瑞穂・江迫横穴群」『鳥取県埋蔵文化財調査報告』第V集、鳥取県教育委員会、1974。
- (12) 瑞穂町教育委員会および瑞穂町文化財愛護協会が踏査作成した分布図による。

### III 調査の経過

#### 1. 調査の経過

今回詳細分布調査の対象となった横道遺跡は、1964(昭和39)年ごろ、遺跡の存在する丘陵の西半部が、ブルドーザーにより畑地として開墾された際に須恵器、土師器片が出土したことから遺跡であることが確認された。さらに1978(昭和53)年には、丘陵東南部の土取り工事のさいにも崖面から縄文早期押型文土器や条痕文土器、石鏃、剝片などが出土しており、当時島根県において押型文土器の唯一の出土地として知られるところとなった。その後も、瑞穂町では荒浜遺跡から旧石器時代の石器が、また長尾原遺跡からは押型文土器が発見されるなど、旧石器時代終末期から縄文時代はじめにかけての遺跡・遺物が明らかにされており、今後、町内でのより詳細な分布調査が進めば、さらにこの時期の遺跡が発見されてくるものと想定される。

今回の横道遺跡の調査は、遺跡のある丘陵西半部一帯が農道の建設計画に含まれたことから実施されたものであるが、丘陵上の堆積土が水田の客土として、また曠土としても良質であることから年ごとに土取りなどによりしだいに消滅していく状況にあったことも分布調査を実施するにいたる原因であった。調査は、農道建設予定地の丘陵西半部を中心に実施したが、以前の土取り工事のさいに縄文土器や石器の出土した丘陵東半部の削平地北側の丘陵一帯にも調査区を設定し、遺物包含の有無や遺物出土層位の確認を主たる目的として実施し、調査面積は、全体で250m<sup>2</sup>であった。まず、丘陵西半部の平坦部に南北方向にA 1区からA 5区を設定し、また、A 1区より西へB 1区・B 2区を設けて調査を開始した。A区・B区とも地表面より下には、有機質を含んだ黒褐色土層、橙褐色土層が堆積し、さらにその下には暗黄褐色火山灰層、灰褐色粘質土層などがあり、地盤は花崗岩の風化した黄褐色砂礫層となっていた。火山灰層はA・B区の全域にはひろがらず、部分的に分布している状況にあり、また火山灰層下の灰褐色粘質土や淡赤褐色粘質土の欠如している地域もみられた。のことからみて、丘陵西半部一帯は、以前の開墾の際にかなりの削平や擾乱をうけたものと推定された。

つぎに丘陵のほぼ中央部にC区を設定した。C区付近はA・B区より約1m高いところにあり、原地形が残っているものと推定されたからである。土層は第1層から第10層まで区別され、第6層の黄褐色土が火山灰層であった。C区でも火山灰層は調査区の中央よりから西側には堆積してなく、火山灰層上の土層にもかなりの凹凸がみられることから、この付近も火山灰層より上部は以前に開墾をうけたものと考えられた。

D区は丘陵東半部に設けた。D区の南側には、以前に土取りが行われて削平された地域が位置する。D区も層序関係はC区とはほぼ同様な状況をしめしているが、遺物の出土層位関係が明らかとなった。すなわち、第2層から縄文前期の条痕文土器や早期末の織維土器、磨石などが出土し、

第3層からは早期中葉の押型文土器が出土することが確認された。また区南端部からは土壙も検出された。

D区の調査に統いてD区の北側丘陵斜面にE区・F区・G区を設定した。E・F区ともD区の層序と同様な関係をしめしており、F区では第2層から縄文前期土器や安山岩剥片が、また、その下位の第3層からは安山岩剥片の接合資料が出土した。G区では第1層から第9層までを調査したが、第4層と第7層の上下2層の火山灰層が堆積していることがみとめられ、上位火山灰層より上層には縄文早期に比定される安山岩剥片が含まれ、下層からも安山岩剥片やチャート製石核が出土することが明らかとなった。上位火山灰層は別項で述べられたとおり輪眞Tn火山灰層(21000B.P.)とされるものであり、出土石核・剥片からみて旧石器時代遺物が分布する可能性のつよいことを示唆している。なお、G区の調査に続き、A区南側にH区を設定した。

## 2. 発掘調査日誌抄

1982(昭和57)年

10月20日(水)～21日(木) 調査日程の協議、測量用基準点の設定。草木の伐開。

10月22日(金) 草木の伐開続行。地形測量。A区(1～5区)、B区(1・2区)の設定。

10月23日(土) A 1区の調査。第1層～第6層に分層。第3層は火山灰層、第6層が地盤の砂礫層となる。第1・2層から縄文土器、石錐、剥片などが出土。

10月25日(月) A 1・A 2区の調査。第1、2層中より縄文土器、土師器、剥片など少量出土。以前の開墾により削平擾乱をうけている。

10月26日(火)～10月30日(土) A 2～A 5区の調査実施。第1、2層中から少量の縄文土器、須恵器、土師器、安山岩剥片が出土。削平のため出土層位は不明確。

11月2日(火)～11月4日(木) A 4・5区の調査続行。遺物包含層としての把握は困難。

11月5日(金)～11月8日(月) B区の調査。遺物はほとんど出土しない。

11月10日(水)～11月12日(金) C区の調査。第1層から第10層までに区分。第6層が火山灰層。

11月13日(土)～11月18日(木) D・E区の調査。D区第2層より縄文前期～早期末の土器出土。第3層からは早期の押型文土器が出土。南端部で土壙検出。

11月19日(金)～11月20日(土) F・G区の調査。F区第3層から剥片の接合資料出土。G区では上・下2層の火山灰層検出。上位火山灰層より上位の土層中から剥片出土。また、火山灰層より下の層からも旧石器時代と推定される石核、剥片出土。D・E・F・G区の調査で縄文時代の土器、石器の出土層位が明確となるとともに上位火山灰層の下にも遺物が包含されることが明らかとなる。

11月22日(月)～11月24日(水) F・G区及びH区の調査。H区の土層は、C区の土層とはほぼ同様な層序関係をしめしているが、遺物は出土しなかった。

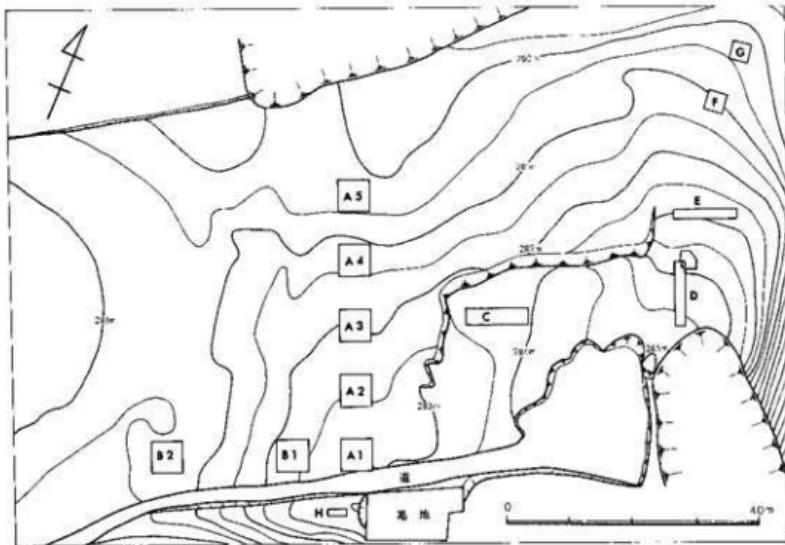
11月25日(木)～11月26日(金) 地形図の補測。土層断面図の作成、写真撮影。全ての調査の完了。

## IV 調査区の概況と出土遺物

### 1. 調査区の概況

今回の調査では、横道遺跡の範囲を確認するために、丘陵西半部にA・B・II区を設け、中央部から東半部にかけてC・D・E・F・G区を設定した(第4図)。つぎに各調査区の概要について述べる。

A区(図版第2、第5図) 丘陵のほぼ中央で南北方向に、5m四方のグリッドを5m間隔に設け、南から1・2・3・4・5区とした。A区東壁の土層断面によると、地表下に黒褐色土層(第1層)、橙褐色土層(第2層)があり、1・2・3・5区では、その下に暗黄褐色を呈する火山灰層(第3層)が堆積している。第3層はA区全体にひろがらず、部分的に分布するような状況にあり、また、上層からの掘削等により消滅しているところもある。第3層の下は、灰褐色粘質土層(第4層)、淡赤褐色粘質土層(第5層)、黄褐色砂礫層(第6層)と続いており、第6層が地盤となっている。第3層の火山灰層が部分的にひろがっていることや、4・5区のように第3層が存在しないか、もしくはきわめて部分的にしか残存していないことからみて、この地域が後世の開墾等によりかなりの擾乱をうけたものと推測される。



第4図 横道遺跡地形図

けていることがうかがえる。遺物は3・4・5区の第1層、第2層から縄文土器、剝片等が出土したが、断片的に包含しており、包含層として把握することはできなかった。

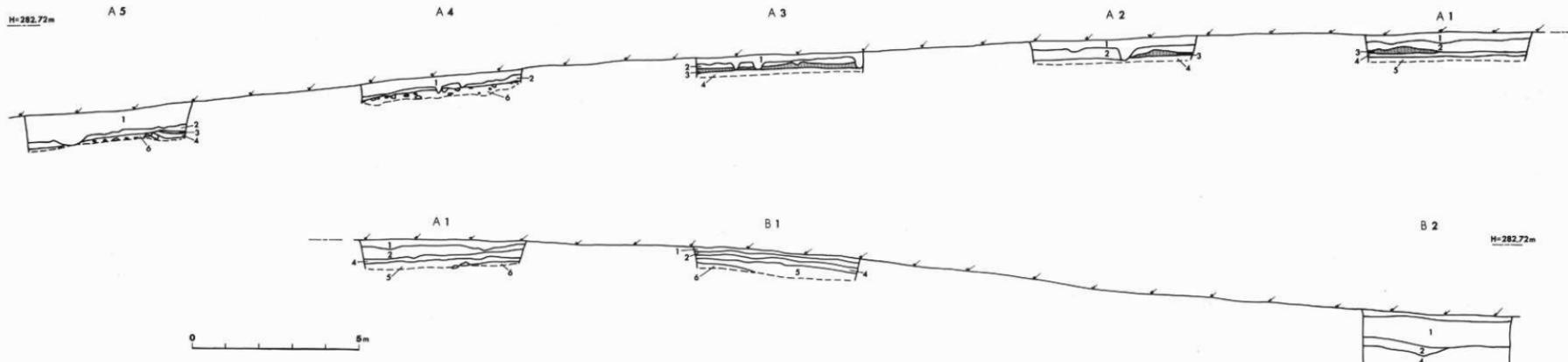
**B区(第5図)** B区はA1区より西へ向って1・2区を設定した。1区(5mグリッド)はA1区より西へ5mの間隔をおき、また、2区は1区より15m西へ設定した。B区の土層は、A区とはほぼ同様の層序をなすが、丘陵は西へ向ってしだいに低くなっている。2区では、第1層や第4層はかなり厚い堆積の状況をしめしている。A1区南壁およびB区では、火山灰層の堆積は認められず、わずかに第2層の下部付近で火山灰が塊状に含まれる状況である。遺物も2区の第1層から須恵器、土師器の細片が出土したのみであった。A・B区の調査の結果、遺跡西半部について縄文時代の遺物は少量ながら出土するが、出土の状況は断片的であり後世の擾乱のため遺物包含層として把握するまではいたらないものとみてよいようである。

**C区(図版第3、第6図)** C区は遺跡中央部よりやや東側に設定した。この付近は標高が283.50mとA・B区にくらべて約1m高く、原地形が残ると想定されたからである。調査区は東西方向に長さ10m、幅2.5mとしたが、第6図で示したとおり、土層は第1層から第10層に区分できる。第6層の火山灰層は南壁断面でみる限り、調査区中央部より西側へは分布しておらず、また、第3層にもかなりの凹凸がみられることや、東壁の第6層火山灰層上にはレンズ状に青色砂質土層が分布することからみて、この地域も上半はかなりの擾乱をうけたものと推定された。遺物は出土しなかった。

**D区(図版第4、第7・8図)** D区はC区の東約23mの丘陵上に設定した。D区の南側は、以前の土取り工事により削平されているが、D区より北側にかけては、原地形が残っていることが推定された。D区は南北方向に長さ10m、幅1.5mとした。地表下で第1層から第6層まで確認でき、第4層が火山灰層となっていた。遺物は、第2層、第3層に含まれており、第2層から表裏条文土器(第10図6)や織維土器(第10図11・19)、磨石(第13図1)が出土し、第3層からは、山形押型文土器(第10図15・16)が出土しており、押型文土器から織維土器へ推移する様相を、層序からも明らかにしている。また、D区南端部では、第3層の橙褐色土層の底面から掘りこまれた土壤(第8図)が検出された。土壤は長さ143cm、幅は南よりで65cm、北側で45cmの楕円形をなし、深さは約20cmである。主軸の方向はN24度Wをとり、壤内の埋土は褐色土、黒褐色土を呈し、部分的に木炭片が分布していた。掘りこまれた土層からみて縄文時代の土壤とみてよいが、性格等については明確でない。

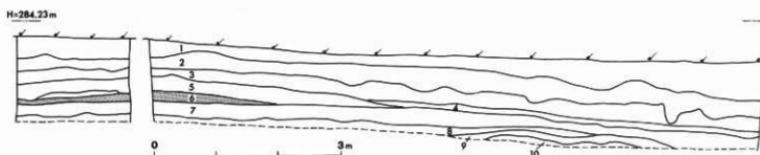
**E区(第4図)** D区の北側約6mの標高283mの地点で東西方向に設定したもので、長さ10m、幅1.5mである。層序関係はD区と同様であり、土層としては整合な状態をしめしている。

**F区(図版第5a、第4図)** F区はE区の北側約15mの標高281mの地点に設定した3m四方の調査区で、層序はD・E区と同様の関係をしめしており、第2層の黒褐色土層から沈線文のめぐる縄文土器(第10図3・5)のほか、安山岩剝片(第12図13・16)が出土し、第3層からは、剝片(11・18)と剝片の接合資料(20)が出土している。第2層出土の剝片が青灰色を呈しているのに対し第3層出土の剝片は、風化が進み、灰褐色を呈している。時期的な差を示しているのかもしれない。



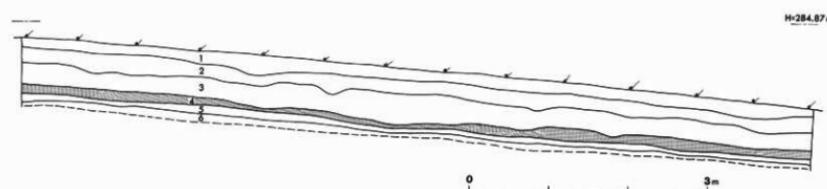
第5図 A区東壁・B区南壁断面図(アミ目は火山灰層)

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| 1. 黒褐色土層        | 4. 灰褐色粘質土層  |
| 2. 橙褐色土層        | 5. 淡赤褐色粘質土層 |
| 3. 暗黃褐色土層(火山灰層) | 6. 黃褐色砂礫層   |



第6図 C区東壁・南壁断面図(アミ目は火山灰層)

- |            |                |             |
|------------|----------------|-------------|
| 1. 暗褐色土層   | 5. 淡赤褐色粘質土層    | 9. 灰色砂質粘土層  |
| 2. 黑褐色土層   | 6. 黄褐色土層(火山灰層) | 10. 赤褐色粘質土層 |
| 3. 橙褐色土層   | 7. 淡赤褐色土層      |             |
| 4. 灰褐色粘質土層 | 8. 黄褐色砂質土層     |             |

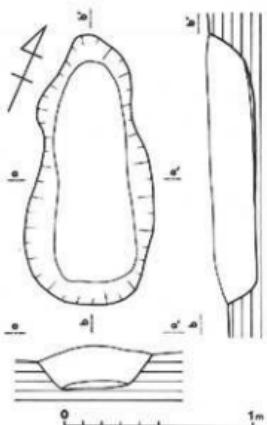


第7図 D区西壁断面図(アミ目は火山灰層)

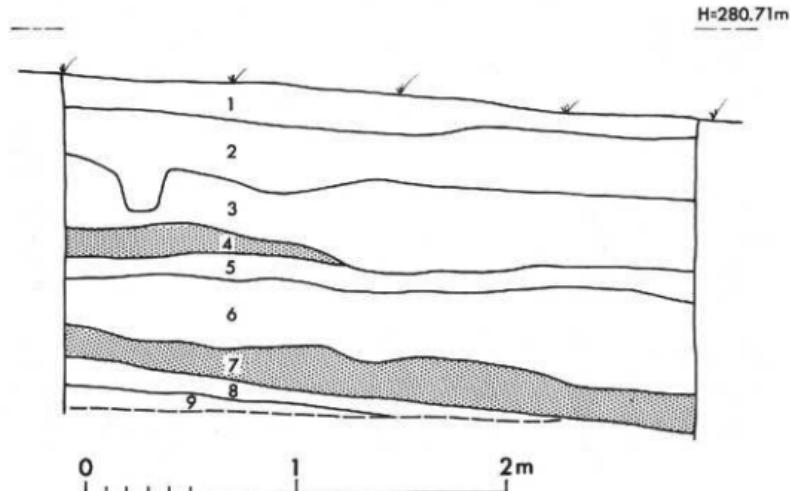
- |          |                 |
|----------|-----------------|
| 1. 暗褐色土層 | 4. 淡黄褐色土層(火山灰層) |
| 2. 黑褐色土層 | 5. 灰褐色粘質土層      |
| 3. 橙褐色土層 | 6. 淡赤褐色粘質土層     |

G区(図版第5b, 第9図) G区は、F区の北約5mの標高約280.5mの地点に設定した3m四方の調査区で、層序は、第1層から第6層まではD・E・F区と同様の様相を示している。第6層の下には黄褐色土層(火山灰層, 7層), 灰色砂質粘土層(第8層), 黄褐色砂質土層(第9層)と続いている。第4層、第7層の上下2層の火山灰層が分布している。遺物は、第2層から剥片(第12図10)か、第3層からも剥片(7)が出土している。また上位の火山灰層より下層の第5層の下半から流紋岩製剝片(第11図2), 第6層上半から流紋岩製石核(1)や安山岩剥片(3・4)が出土しており、上位火山灰層(姶良Tn火山灰層, 21,000B.P.)の下に旧石器時代遺物が分布する可能性がつよい。

なおH区(3×1m)は、大まかにはC区と同様の層序をしめすが、遺物は出土しなかった。



第8図 D区土壤実測図



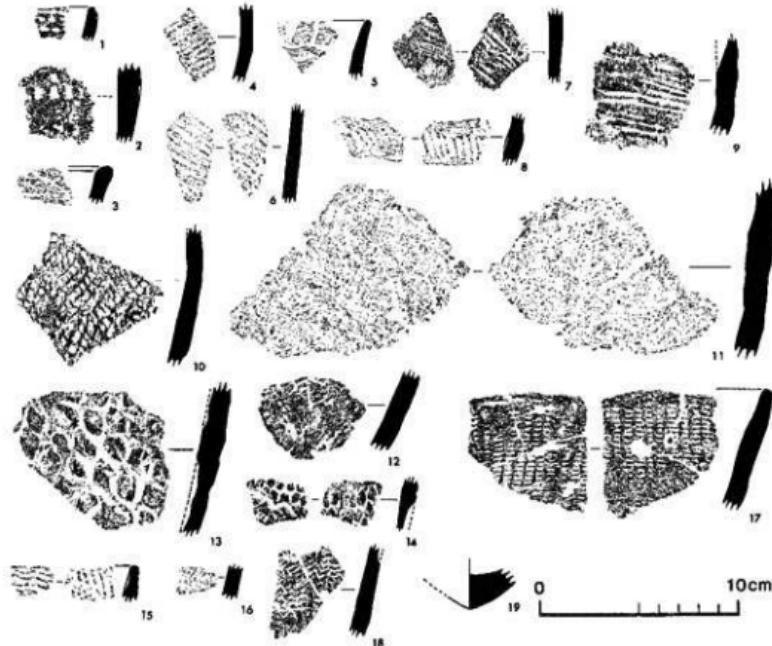
第9図 G区西壁断面図(アミ目は火山灰層)

- |          |                 |                |
|----------|-----------------|----------------|
| 1. 暗褐色土層 | 4. 暗黄褐色土層(火山灰層) | 7. 黄褐色土層(火山灰層) |
| 2. 黒褐色土層 | 5. 灰褐色粘質土層      | 8. 灰色砂質粘土層     |
| 3. 橙褐色土層 | 6. 淡赤褐色粘質土層     | 9. 黄褐色砂質土層     |

## 2. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文時代の土器、石器、剝片やG区の上下2層の火山灰層に挟まれた上層から出土した旧石器時代の石核、剝片がある。このほか表土層から古墳時代の須恵器、土師器も採集されているが、量はきわめて少なく、細片である。

縄文土器(図版第6a、第10図) 縄文土器は、上位の火山灰層より上の黒褐色土層や棕褐色土層から出土しており、縄文時代前期のものと縄文時代早期のものとがある。なお、遺跡東南部の1978(昭和53)年の土取りの際に出土した土器についても、採集者の吉川正氏が作成した土層略図からみて、ほぼ同じ層からの出土とみてよいようである。縄文前期の土器(第10図1~8)では、文様は、(a)刺突文、(b)沈線文、(c)条痕文に区分される。(a)刺突文(1・2・8)では、1は口縁端部に1条の沈線、その下に横円形の刺突文が2段にめぐらされる。器形はやや小形の鉢形土器とおもわれる。2は深鉢形土器の胴部片で、2段に刺突がめぐらされている。器厚は1.2cmと厚手の土器である。8も深鉢の口縁部にちかい破片で、表裏両面に斜位の刺突文がめぐり、地文としては条痕文がほどこされている。いずれも淡褐色を呈し、胎土に石英粒を含んでいる。(b)沈線文(3・5)では、器厚が6~8mmで地文として貝殻条痕がほどこされる。3は口縁直下に右下りの細い沈線がめぐり、



第10図 縄文土器拓影実測図

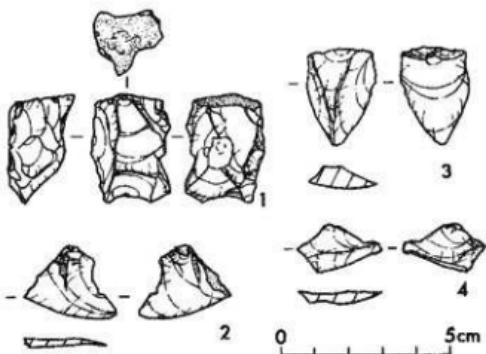
5は口縁部外面上部に長さ1.2cm前後の平行短線がほどこされ、その下には横位の粗い山形に走行する沈線がめぐらされている。いずれも胎土に石英・長石粒を含み焼成もよい。(c)条痕文(4, 6・7)は、二枚貝による条痕調整のほどこされたもので、器厚が6mm前後で胎土に石英粒を含んでいる。褐色を呈し、焼成もよい。6・7は表裏に条痕文がほどこされている。

このように縄文前期の土器は、文様としては条痕文を主体とし、刺突文や沈線文がめぐらされるものであった。これらは瀬戸内沿岸における羽島下層式土器と呼ばれる土器群に併行するものとおもわれ、縄文前期前半に位置づけることができるであろう。なお、第10図2の上器は、表面の観察のみでは明確ではないが文様や器壁からみて、胎土に纖維混入の纖維土器である可能性がつよい。

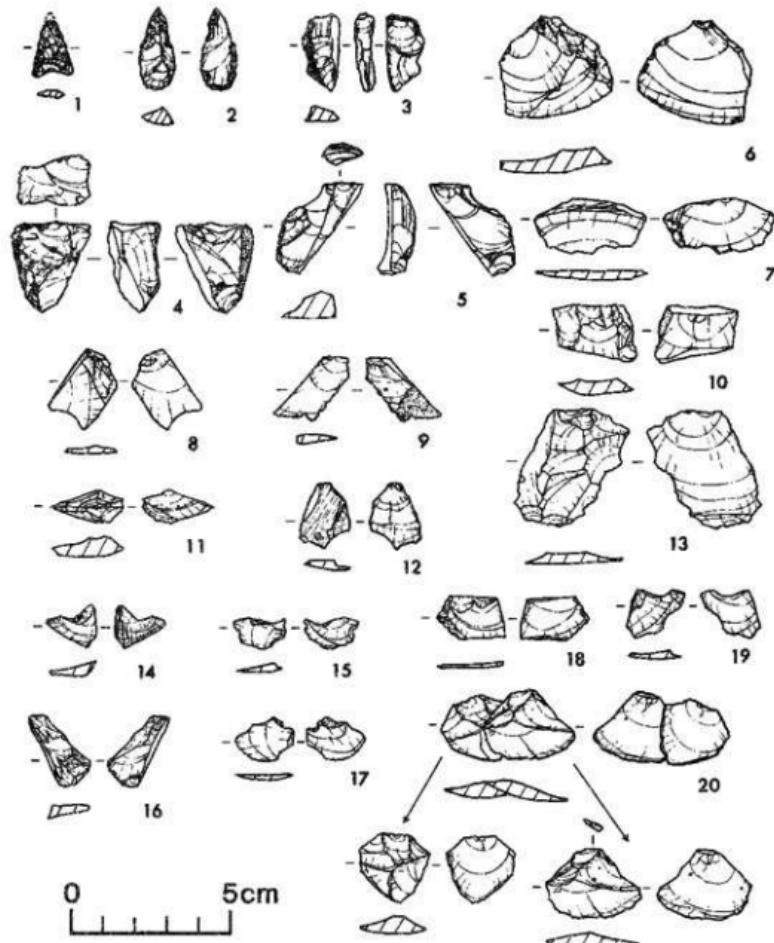
縄文早期の上器(第10図9~19)では、(a)胎土に植物纖維混入の纖維土器(9~12・19)と(b)押型文土器(13~18)とに区別される。(a)纖維土器では、文様は器表面に二枚貝条痕文のめぐらされるもの(9)や羽状縄文のもの(10), 無文のもの(11), 表面に細かな斜行状の擦痕のみられるもの(12)などがある。淡褐色を呈し、器厚は0.8~1.3cmと厚く、胎土に植物纖維の混入が顕著にみられる。12のように表面が黒くすりけおり、煮炊きに使用されたことをあきらかにしているものがある。尖底をなす底部(19)は11と同一個体である。(b)押型文土器は、器厚が0.7~1.2cmで、灰褐色もしくは暗褐色を呈している。器壁に楕円や山形、格子目の押型文がめぐらされる。楕円文では、楕円の長径が1.3cm, 短径1cm前後の粗大な楕円のめぐらるもの(13)や径5mm前後の小形の楕円文(14)とがあり、山形文では、表面が山形文で口縁部内側に平行短線のめぐらるもの(15)や有軸の山形文(18)がある。また17は、ネガティブな格子目の押型文が表裏両面にほどこされている。胎土には石英粒、長石粒を含み、纖維の混入のあるもの(13)もみとめられる。

縄文早期の土器には、押型文土器と纖維土器とがあった。押型文土器では、粗大な楕円文がめぐり、胎土に植物纖維の混入したいわゆる「高山寺式土器」と、小形の楕円文やネガティブな山形文、格子目文のほどこされる

「黄島式土器」とがみられるが、山形文のなかには有軸のものがあり、古い様相をしめすものも出土している。纖維土器では、条痕文のもの、羽状縄文のもの、斜行状擦痕のみられるものなどがあった。纖維土器は、中国山地一帯から日本海沿岸を中心に分布することがしられている。広島県の帝釈峡遺跡群では、縄文早期中葉の押型文土器と縄文



第11図 G区第5・6層出土石核・刺片実測図

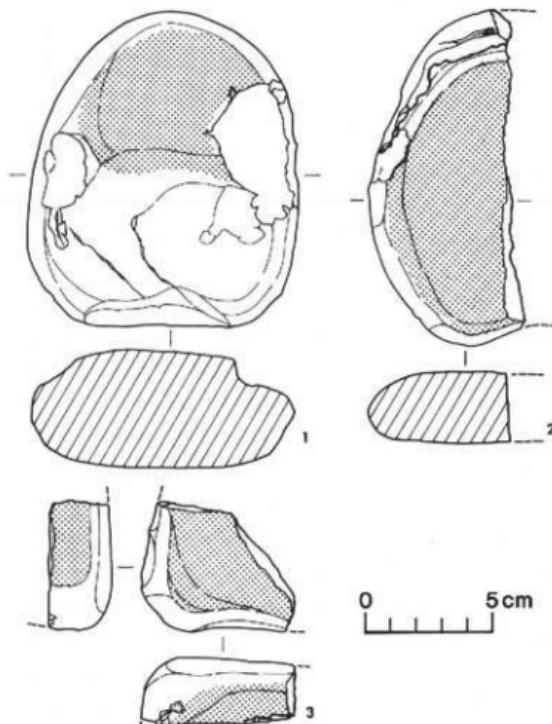


第12図 石器・剥片類実測図

前期前半の羽島下層式土器との間をうめる土器群であることがあきらかにされており、本遺跡出土の繊維土器も縄文早期後葉に位置づけることができる。したがって横道遺跡出土の縄文土器は、早期中葉の黄島式押型文土器から高山水式の押型文土器、さらには早期後葉の繊維土器、そして前期前半の羽島下層式土器へと推移していくことが確認でき、本遺跡での人々の生活の中心も縄文早期中葉から前期前半にあったものと想定できるであろう。

石器(図版第6b・第7、第11図～第13図) 横道遺跡から出土した石器では、従来採集された石鎌や剥片は、10点前後が数えられたが、今回の調査では、石鎌、石錐、楔形石器、石核、磨石、剥片などを含め約30点が出土した。これらの石器、剥片は、A区およびF区、G区を中心に出土している。しかし、A区においては後世の削平、開墾等のため出土層位は、必ずしも明確でない。F区・G区では、第4層とした上位の火山灰層より下の第5層、第6層から出土したもの(第11図)とそれより上位の第2層、第3層から出土したもの(第12図7・10・11・13・16・18・20)などに区分できる。

G区第5・6層出土石器(第11図) 1はG区第6層から出土した石核で流紋岩製である。図の上面には自然面が残るが、周辺部からは横剥ぎの剥片をとるために剥離がなされている。2は剥片で流紋岩製である。図の上端に打面調整された小さな打撃面が残っている。また、裏面右側には自然面がある。1のような石核から製作された横長剥片とおもわれる。3・4は、第6層から出土した剥片で安山岩製である。3は図示の裏面に主剥離面が残り上端の打撃面には調整痕がみとめられる。表面がかなり風化しており灰褐色を呈している。これらの石核、剥片は、上位火山灰層より下位にあり、旧石器時代終末期の遺物とみてよい。また石核、剥片からみて小形の横長剥片を素材とした石器の存在する可能性がつよい。



第13図 磨石・砥石実測図(アミ目は磨耗痕)

上位火山灰層より上層出土の石器(第12図) F区およびG区においては、層位関係から火山灰層より上位から出土したことがあきらかであるが、A区出土の石器については、後世の削平のため出土層位については、明確でない。1はA1区第1層出土の石鎌である。上端を少し欠損するが、二等辺三角形鎌で、基部の抉りは浅い。現存の長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さは2mmあり、安山岩製である。表面の風化が著しい。側辺部には表裏とも全面に細かな剥離調整がほどこされている。縦長剝片を使用している。2は石鎌もしくは石錐とみられ、長さ2.6cm、幅1.1cm、厚さ5mmを測る。図示の正面は全面削離、裏面は周辺調整で主削離面が残っている。断面三角形を呈している。基部に打撃面が残り、調整がほどこされる。A5区第1層から出土。3はA4区から出土した楔形石器で、長さ2.4cm、厚さ5mmを測る。正面と左側辺に調整痕がみられる。調整は上ド、両側辺方向からの階段状剥離を行っており、上下両端には細かな調整の残る打撃面がみられる。横長剝片を素材とし、表面がやや風化して灰褐色を呈している。安山岩製。4は安山岩製の石核でA4区第1層から出土している。正面左側辺に自然面が残る。周辺部から横剥ぎ剝片をとるための剥離がなされている。5~20は、剝片で、大部分のものは横長の剝片である。5は、乳白色を呈する流紋岩製の剝片で、図示正面左側辺に細かな調整痕が残る。6は横長剝片で周辺に細かな調整削離がみられる。打撃面は上端にある。5・6ともA5区から出土。7はG区第3層から出土の安山岩剝片で、上端に打面があり平坦である。風化して灰褐色を呈している。8~13も安山岩剝片で片面には主削離面が残り、8~11は、表面が少し風化して灰褐色を呈している。14は黒曜石製の剝片で図示の裏面左側辺には細かな調整がみられる。15~19は安山岩製の横長剝片である。20はF区第3層から出土した接合資料で、図示正面には周辺からの剥離面がみられ、裏面には主削離面が残る。打撃面は、いずれも図示の上面にあり、安山岩製である。表面はかなり風化しており、灰褐色を呈している。これら出土した接合資料や剝片からすると、主として素材から比較的小形の横長剝片を剥ぎとついたものとおもわれる。また、剝片には、縦長のものと横長のものの両者が存在し、調整痕のある打撃面をもつものがあることからみて剝片を剥離していく過程で随時打点を転移していったことがうかがえる。

磨石・砥石(第13図) 1は長さ12.5cm、幅10.6cm、厚さ4.5cmの楕円形の磨石で、表裏両面が磨耗し、また、両側辺の一部には敲打された痕跡がのこる。D区第2層から出土。2も磨石で長さ13.4cm、厚さ2.8cmで右半部を欠失する。表裏両面中央部が磨耗している。3は大部分を欠損するが、砥石とおもわれる。表裏両面、側面ともよく磨かれており凹状の面となっている。

これらの石器、剝片類は、A区出土のもの以外は、いずれも上位火山灰層より上層の第2層、第3層から出土しており、伴出土器からみて繩文時代早期から前期にかけてのものと推定している。なお、安山岩剝片のなかで表面の風化が進み灰褐色を呈するものと、青灰色もしくは黒灰色をなすものがあるが、螢光X線分析法による原産地推定によれば、灰褐色を呈する剝片は、広島県冠高原付近産出のものである可能性が高く、また青灰色を呈する剝片は、原産地は明確でないがH群とされるものである。いずれの安山岩とも冠高原付近からもたらされたものであろう。

## V ま と め

横道遺跡は、1964(昭和39)年ごろ畠地として開墾された際に、土師器、須恵器片とともに縄文時代早期の押型文土器や石器などが採集されたことから遺跡として確認された。さらに1978(昭和53)年にも遺跡のある丘陵東南部の一部が土取り工事により削平されたときにも縄文土器、石器が発見され、当時、島根県においては唯一の縄文早期の押型文土器出土地として知られるようになった遺跡である。

今回、遺跡の詳細分布調査を実施する契機となったのは、遺跡のある丘陵西半部が農道の建設計画地に含まれたことによるが、先述したように丘陵が年々削平されていき、遺跡が消滅する恐れが大きかったことも調査を行う大きな要因であった。このことから今回の調査は、遺物包含層の有無やひろがりおよび遺物の出土層位を明確にすることを目的として実施した。つぎに今回の調査で得られた成果についてまとめておきたい。

1. 遺跡の範囲について 調査は丘陵上の平坦部西半の農道予定地ならびに原地形が残ると想定された丘陵中央部から東半部を中心調査区を設定して行った。A・B区においては、以前の開墾の際にかなりの削平をうけたとおもわれ、遺物は出土するが、きわめて断片的な出土状態をしめしていた。したがって現在では、この付近には遺物包含層は分布していないものとみてさしつかえなかろう。一方、中央部から東半部に設定した調査区では、狭い調査区であったにもかかわらず縄文時代の遺物を包含する層位を確認でき、D区においては、縄文時代に比定される土壤1基の検出にも成功した。このことから東半部一帯には縄文時代の遺構・遺物が残存する可能性のつよいことを確認した。また、さらにG区においては、上・下2層の火山灰層が確認されたが、上位火山灰層と下位の火山灰層に挟まれた第5、6層から石核・剥片が出土することが判明した。この上位火山灰層は、付録で報告されたとおり、姶良Tn火山灰で<sup>14</sup>C年代では、21,000~22,000 B.P.yとされるものである。したがってG区第5、6層出土の石核・剥片は少なくとも20000年以前の旧石器時代遺物とみられ、付近に旧石器時代の遺物包含層の存在する可能性の高いことを示唆している。今回の調査では、費用、期間等からトレンチ調査を主体に実施せざるを得なかつたが、遺物包含層は丘陵東半部の土取り場より北側で東西約30m、南北約50mの範囲とみてよいであろう。なお、遺跡の周辺では、現在具体的な開墾、開発の計画はないようであるが、本遺跡の重要性からみて早急に保存計画をたてられることが必要と考える。

2. 出土遺物について 遺物では縄文時代の土器、石器や旧石器時代の石核などが出土した。

縄文土器には縄文前期前半の羽島下層式土器群や早期後葉の楕円土器ならびに中期中葉の押型文土器とがあった。このうち押型文土器では、山形文と楕円文の両種から構成される黄島式土器と粗大な楕円文のめぐらされた高山寺式土器とがみられたが、山形文のなかには古い様相をしめ

す有軸状山形文も出土している。このように出土土器からみると縄文早期から前期ごろを中心にして常まれた遺跡であることがしられる。

最近調査の進行とともに西中国山地一帯でも縄文早期から前期にかけての土器が発見されるようになってきた。なかでも広島県の帝釈峠遺跡群では、押型文土器から織維土器、さらに羽島下層式土器への推移を層序から明らかにしており、中国地方縄文土器編年のはじめとされている。今回の横道遺跡の調査においても、D区第2層には羽島下層式土器と織維土器が含まれ、第3層からは押型文土器が出土することがあきらかとなつた。したがって、従来から指摘されてきたように押型文土器から織維土器、羽島下層式土器への変遷を裏付けることができた。

石器では、石鎌、石錐、裏形石器、石核、剥片など約30点が出土した。

A区から出土の石器は、以前の削半開墾のため出土層位は明確にできないが、D・F・G区においては、剥片類の出土層位をあきらかにすることはできた。伴出の土器から縄文早期末から前期前半ごろに比定される第2層からは青灰色をなすやや黒味の強い安山岩剥片(第12図10・13・16)が出土し、早期中葉とみられる第3層では表面が風化して灰褐色を呈す剥片(7・11・18・20)が出土している。第3層出土のものには接合資料(20)も1例みられた。これらの剥片は、ほとんどが横長の剥片であり、石器製作の素材として横長剥片を使用していたことをしめしている。このことは出土石核からもうかがえるが、縄文早・前期の剥片剥離技術を知る上で貴重な資料となろう。また、G区では上・下2層の火山灰層に挟まれた第5、6層から流紋岩製石核、剥片と安山岩製剥片が出土した。先述したようにこれらの石核、剥片類は火山灰の降下年代からみて20000年以前に遡るものであることをあきらかにしている。今回の調査では調査区が狭小で石器類を発見することまではできなかったが、石核、剥片類からみて横長剥片剥離技術の一端をしめしており、技術的には広島県大朝町の地宗寺遺跡の剥片剥離技術<sup>(1)</sup>にちかいものとみてよからう。付近に旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性がきわめて高い。なお、石材の産山地同定によれば、G区第5、6層出土の灰褐色を呈す安山岩は、第11図4が広島・冠高原産出のものと判定され、また、F区第2、3層出土の青灰色をなす安山岩も、原石産地は不明の日群とされるが、縄文早期の広島県利松住吉遺跡、円明寺遺跡出土の安山岩と共通する石材とみられることから、いずれも冠高原一帯から産出したものと推定される。なお、黒曜石は、島根県隱岐島の久美産出のものである。

以上のべてきたように今回の詳細分布調査により、横道遺跡の縄文時代の遺物包含層のひろがりや出土層位を確認できたのみならず、今回新たに旧石器時代の遺物の存在も想定できたことは、当初予想もしなかったような大きな成果であったといつてよい。

今後は、今回の調査の結果を参考にして本遺跡の保存計画を早急に立案、検討されるよう再度関係機関に要望しておきたい。

#### 注

- (1) 三枝館二編「地宗寺遺跡発掘調査報告：広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター」、1982。
- (2) 蛍光X線分析法によった。同定は、京都大学原子炉実験所 藥科脇男氏に依頼した。

## 付編 横道遺跡の火山灰と遺物包含層の年代

林 正久\*

成瀬敏郎\*\*

### 1. はじめに

横道遺跡は島根県中央部の瑞穂町にあり、江川支流出羽川の比高30mの河岸段丘上(標高280m)に位置し、段丘疊をおおう火山灰層の上部から縄文土器、下部から石器片が出土する。

遺跡と火山噴出物(テフラ)との関係について、中国地方では、広島大学文学部による帝釈峠遺跡の発掘報告(1978, 1979, 1980, 1981)をはじめ、成瀬・柴田(1980, 1981)による下本谷遺跡の研究がある。また、成瀬他(1982)によれば、中国地方の遺跡においては、九州起源の広域火山灰、姶良Tn火山灰(町田・新井, 1976)とアカホヤAh火山灰(町田・新井, 1978)の二層が重要な鍵層となっていると報告している。本報告では従来の成果をふまえながら、三瓶火山起源のテフラについても、遺跡との関係を考察してみたい。

### 2. 島根県の主要テフラの概要

島根県下にみられる主要なテフラについて従来の研究(松井・井上 1971, 町田・新井 1976, 町田・新井 1979, 津久井・櫛山 1981, 林 1982)をまとめたものが表1である。大山松江軽石は角閃石、シソ輝石を中心とする重鉱物を15~30%wt含む軽石層であるがその分布は県東部に限られ江川以西では見つかっていない。

姶良Tn火山灰は県下全域に分布しているが、土壤化を受けたり他のテフラとの混在によって単独の地層として存在していることは少ない。しかし、数地点においては、厚さ15~20cmの比較的純粋な地層がみられ、扁平な火山ガラスが大量に含まれている。表1には、もう一つの広域火山灰であるアカホヤAh火山灰(6,500年前噴出)を掲げていない。これは、独立した地層をなしている地点が県内では見つかっておらず、黒ホク土中などに混在しているのが、ガラスの屈折率などの鉱物分析によって確認されているにすぎないからである。

三瓶火山起源のテフラの中で比較的広範囲に分布するのは、木次、雲南、池田、浮布の降下軽石層である。木次軽石は重鉱物が乏しく(1~3%wt)黒雲母(バーミキュライト)が多く含まれている。三瓶山から北東方向に分布する。雲南軽石は木次軽石より広く分布し三瓶山の南方から北東方向に噴出したもので広島・岡山県にも分布する可能性がある。重鉱物は1~6%wt、気泡に富む火山ガラスが大量に含まれる。

\* 島根大学教育学部講師

\*\* 兵庫教育大学社会系助教授

表1 島根県にみられる主要テフラの層序

テフラ名	供給源	性状	層厚(cm) C <sup>14</sup> 年代 (×1000年B.P.)	鉱物組成
三瓶最新期火山灰 SN	三瓶山	l, afa	200~30	Pl>Gl>Hb>Bi, Qt>mt
太平山火碎流 <sup>a</sup> OhF	三瓶山	lfl	>4000	3.6
浮布降下軽石 <sup>b</sup> SUP	三瓶山	pfa	300~30	Pl>Hb>Gl>Bi, Qt, mt
浮布火碎流 <sup>c</sup> UF	三瓶山	lfl	>500	16.4
姶良Tn火山灰 AT <sup>d</sup>	姶良カルデラ	afa	20~15	21~22 <sup>e</sup> Gl>Pl>Bi, Qt, Hb>mt, Hy
池田降下軽石 <sup>f</sup> SIP	三瓶山	pfa	1000~20	Pl>Hb>Bi>Gl, Qt, mt
飯南火山灰 <sup>g</sup> SIN	三瓶山	afa	20~10	Pl>Hb>Bi, Qt>Gl, mt
大田軽石流 <sup>h</sup> OF	三瓶山	pfl	>2000	>37.8 Gl>Pl>Qt, Bi>Hb, mt
雲南降下軽石 <sup>i</sup> SUN	三瓶山	pfa	350~10	Gl>Pl>Qt, Bi>Hb, mt
稻瀬火碎流 <sup>j</sup> KF	三瓶山	?	>300	Gl>Pl>Qt>Bi, mt>Hb
本次降下軽石 <sup>k</sup> SKP	三瓶山	pfa	300~30	70~80 <sup>l</sup> Pl>Bi, Gl, Qt>Hb, mt
大山松江軽石 DMP <sup>m</sup>	大山	pfa	400~20	<130 Pl>Hb>Qt, Bi>Gl, mt, Hy

l:ラビリ, afa:降下火山灰, pfa:降下軽石  
lfl:火碎流, pfl:軽石流

Pl:長石, Qt:石英, Gl:火山ガラス  
Bi:黒雲母, Hb:角閃石, Hy:シソ輝石  
mt:鉄鉱物

(1) 松井・井上(1971)による命名を一部修正。

(4) 津久井・櫻山(1981)の推定。

(2) 町田・新井(1976)による。

(5) 町田・新井(1979)による。

(3) 林(1982)による命名。

池田軽石, 浮布軽石はともに重鉱物を多く含み(20~30%wt)角閃石が圧倒的に優勢である。鉱物分析だけでは両者の識別は困難であるが、姶良Tn火山灰が両者の間に挟在することと、X線回折の特性の違いによって区分を行った。とともに三瓶山から南東方向に分布しているが、池田軽石の分布範囲がひとまわり大きい。

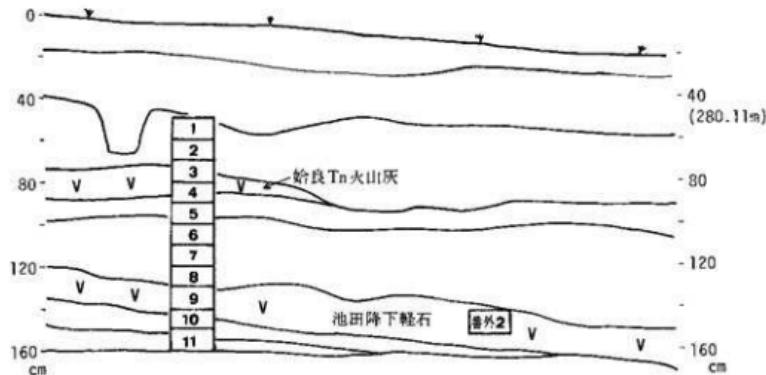
飯南、三瓶最新期火山灰は特徴ある火山灰で現地で容易に識別できるが、噴出量、分布範囲は大きくない。なお、三瓶火山の火碎流、軽石流の分布は火山本体の周辺に限定される。

### 3. 横道遺跡の土壤分析結果

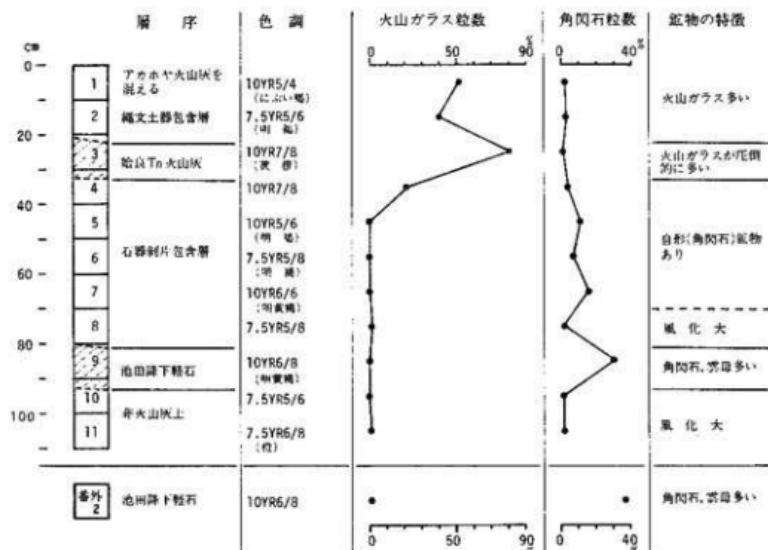
#### (1) G区の土壤分析結果

第14図に示すように、G区西壁断面のうち地表下50cmから160cmの深さまで10cm間隔で計12個の試料を採取した。試料は水洗して細粒部をとりのぞき、粒径0.125~0.088のものを選別し、顕微鏡下で300~400個の鉱物の同定を行った。分析結果は第15図に示す。試料1と3に火山ガラスを大量に含む層がみられる。試料3は、扁平な火山ガラスとその含有量が80%にも達することから、姶良Tn火山灰と考えられる。純度の大きな姶良Tn火山灰のガラスは県内の他の地点の試料でも70~90%を占めている。また試料1にはアカホヤAh火山灰が混在していると考えられる。

角閃石の含有量からみて、試料9および番外2に顕著なピークがみられる。この層準には雲母が多く含まれることからも、三瓶の池田降下軽石に対比される。



第14図 横道遺跡G区断面と試料採取位置



第15図 横道遺跡G区の土壤分析結果

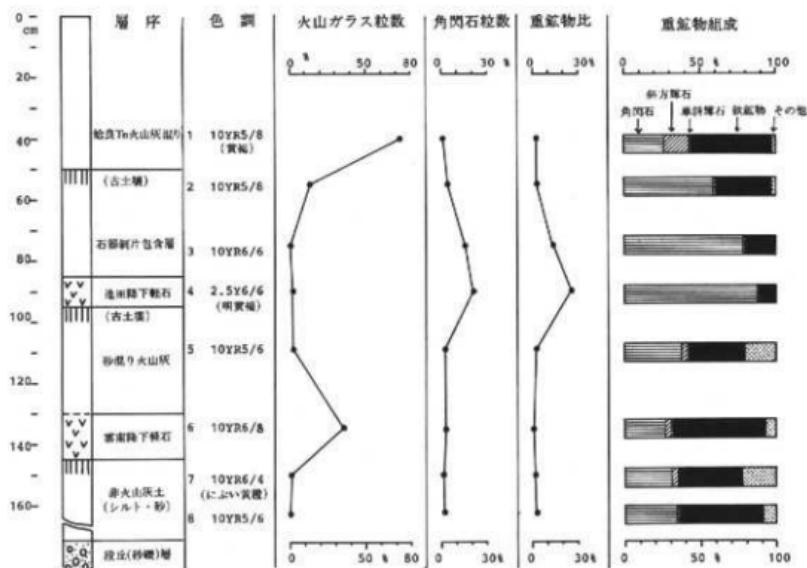
## (2) D区西のテフラの分析結果

第16図はD区西方の標高285m地点において地表下160cmまでの土壌から8個の試料を採取し、G区の試料と同様の方法で分析したものである。この地点は段丘面最頂部にあたり、G区より約5m高い位置にある。試料1がガラスの多い姶良Tn火山灰、試料4が角閃石に富む池田降下軽石層にある。重鉱物分析からみても、試料1に多量のシソ輝石が含まれており他の地域での報告と矛盾しない。また、試料4は全試料中最大の角閃石含有を示し、X線回折からも池田降下軽石であることが裏付けられる。また、石器剥片包含層である試料2、3にも角閃石が多くみられるので、この層準は池田軽石噴出後に堆積した池田型の火山灰が含まれていると考えられる。三瓶火山周辺の地域でも、池田型の軽石と火山灰の間に古土壤などはみられず、1ユニットのものと考えられるので、試料2~4までの時間的間隔は小さいといえる。

この地点では池田降下軽石の下にもう一層の軽石層(試料6)が存在する。この軽石は重鉱物が1.3%wtと少なく、気泡に富む火山ガラスが40%近く存在することから雲南降下軽石に対比される。

## 4. 遺物包含層の年代

本遺跡にみられるテフラは、以上述べてきたように4層が確認された。もちろん、4層が段丘面全体にわたって分布しているわけではなく、レンズ状の地層もみられる。しかし遺物包含層についていえば次のことが指摘できる。



第16図 横道遺跡D区西(285m地点)の火山灰の鉱物組成

縄文土器は姶良Tn火山灰より上部でアカホヤAh火山灰の混入する上層付近に存在する。そして、石器剥片は姶良Tn火山灰より下部で池田降下軽石より上部の池田型火山灰層から出土している。

アカホヤAh火山灰の噴出年代は6,500年前頃といわれ、姶良Tn火山灰の年代は21,000~22,000年前と報告されているので、縄文土器の包含層は、6,500年前かそれよりやや古い時期のものと考えられる。

石器剥片包含層の年代を考えるには、池田降下軽石の噴出時期を明確にしなければならない。しかし、現在の所、噴出年代を示すような証拠は発見されていない。そこで他の地域で得られた資料をもとに、池田降下軽石の年代を推測してみることにしたい。

島根県の仁多町阿井には、大山松江、木次、雲南、池田、姶良Tn、浮布のテフラが連続的にみられる露頭が存在する。雲南降下軽石と木次降下軽石の間には、厚さ5mに達する湖成粘土層があり、中国山地における大きな環境変化(気候変化)があったことを示している。町田・新井(1979)は立山の室堂疊層が5.0~5.5万年前の亜氷期のものと考え、ヴェルム氷期のピークといわれる2万年前より寒冷であった可能性を指摘している。また、4.5~4.7万年前に噴出した大山台古軽石(DKP)の直下に泥炭層がみられ(倉吉市秋喜), 大西(1974)は、花粉分析によって、この泥炭は、亜氷期のピークをすぎ間氷期に向かう時代の環境を示すと報告している。われわれは今のところ仁多町にみられる湖成粘土層もこの5.0~5.5万年前の亜氷期に対比されるものと考えている。

以上のことから、雲南降下軽石の年代は、5万年前かそれより新しい時期と推定される。また池田降下軽石は3~4万年前と考える。従って横道遺跡の石器剥片包含層は、幅をとり、2~4万年前ということができる。

## 5. 結論

横道遺跡で発見された縄文土器包含層と石器剥片包含層の二層について、テフラとの関係から年代を論じてきたが、縄文土器包含層については、姶良Tn火山灰とアカホヤAn火山灰から、6,500年前かそれよりやや古い時期に対比され、従来の見解と似たような結果を得た。また、石器剥片包含層の年代について、三瓶起源の池田、木次降下軽石の年代が従来の知見よりかなり古くなる可能性があることから、幅をもたせて2~4万年前と考えた。

テフラのX線回析は島根大学教育学部の三浦清教授に分析していただいた。ここに深く感謝いたします。

## 文献

- 大西裕夫(1974):山陰地方の第四紀中・後期の植物化石、島根大学文理学部紀要、理学科篇、7、101~115。  
津久井雅志・櫛山雅則(1981):大山山麓における三瓶山起源の降下軽石層の発見とその意義、地質学雑誌、87、559~562。

- 成瀬敏郎・柴田喜太郎(1980)：下本谷遺跡の火山噴出物と旧石器包含層の年代，『下本谷遺跡発掘調査概報』広島県教育委員会，25-39。
- (1981)：下本谷遺跡の火山噴出物と山石器包含層の年代—第II報—，『下本谷遺跡第2次発掘調査概報』広島県教育委員会，17-22。
- 河瀬正利(1982)：中国地方の遺跡の火山灰による編年，山陽放送学術文化財団リポート，26号，21-26。
- 林 正久(1982)：火山灰からみた山陰地方の地形，日本地理学会予稿集，22，108-109。
- 広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室(1978)：『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』I。
- (1979)：——— II
- (1980)：——— III
- (1981)：——— IV
- 松井繁司・井上多津男(1971)：三瓶火山の噴出物と層序，地球科学，25，147-163。
- 町田 洋・新井房夫(1976)：広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義，科学，46，339-347。
- (1978)：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰，第四紀研究，17，143-163。
- (1979)：大山倉吉輕石層—分布の広域性と第四紀編年上の意義，地学雑誌，83，313-330。

図版第1

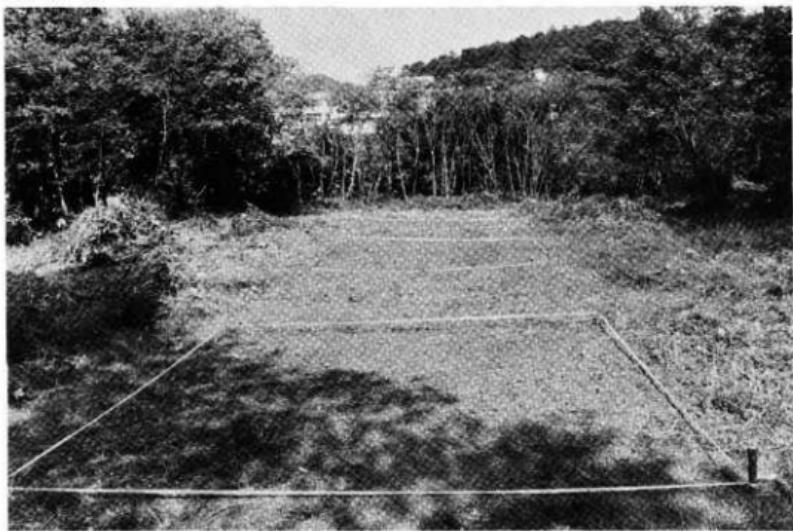


a. 横道遺跡遠景(東北より)



b. 遺跡東半部近景(北より)

図版 第 2



a. A区全景調査前(南より)



b. A区全景調査後(北より)

図版 第 3



a. C区全景調査後(西より)



b. C区南壁断面

図版 第 4



a. D 区全景調査後(北より)



b. D 区土壤検出状況

図版 第 5



a. F 区西壁断面

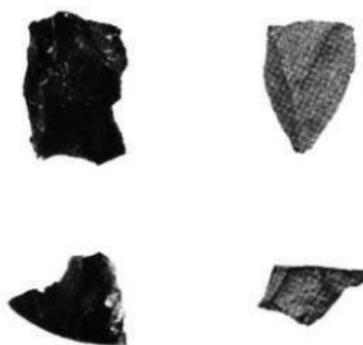


b. G 区西壁断面

図版 第 6

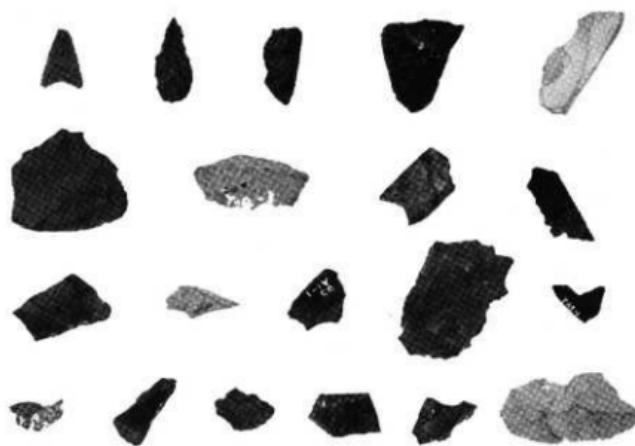


a. 繩文土器

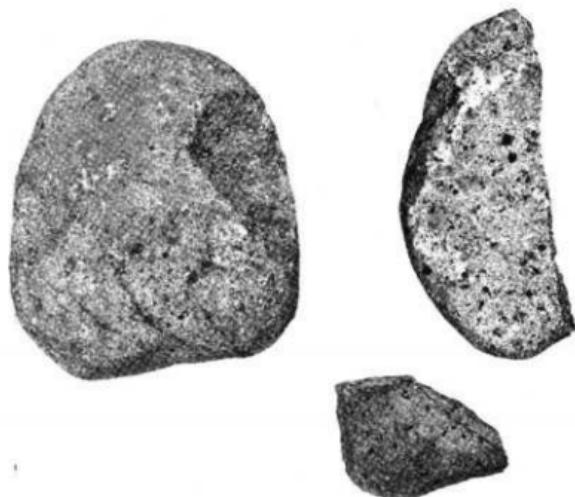


b. G区第5・6層出土石核・剥片(第11図参照)

図版 第7



a. 石器・剥片類(左上から右へ第12図の番号順)



b. 磨石・砥石(第13図参照)

1982年4月5日 4.27.314

## 機道運動

學生聯合會主委會

編集  
湖南正刊

發行  
易班尼士智都斯理斯教育委員會

印制  
電子印務株式會社